メルヘンは時空を超えて旅をする

―「手無し娘」のルーツを求めて―

森　義信*

要　　約

ヨーロッパ全域に広く口頭伝承されてきた「手無し娘」という昔話は、書籍としても伝承されてきたが、そのもっとも古い版は12世紀まで遡りうる。この昔話が最初に語られ始めた土地については諸説あるが、イングランド・ビザンツ・アラビア＝スペインをあげる研究者が多い。

私の見解は、次のようなものである。伝承文学の面からはイングランドが有力であるが、ここには大陸諸国に比して口承説話の多様なバージョンがみられない。モティーフや歴史的背景の観点からはビザンツ帝国がより有力とみられる。ビザンツ帝国は古くから東方世界との接触が盛んで、イスラム文学の影響をいち早く受けた。また現存するバラエティに富んだ口承説話の面からはイタリアが最有力視されうる。イタリアは、ビザンツ・イスラム双方からの影響を、十字軍時代を通じて受け続け、ルネサンス期には文化情報の発信源でもあった。それゆえ、多様なバリエーションの「手無し娘」がここで流布し、出版されたのも理解できよう。さらに、イスラム文化はもとよりイタリア文化をも受け入れたスペインは、レコンキスタの完了と大航海時代の開始以降、外の世界に向かってヨーロッパのキリスト教文化や伝承文化を発信した。

口承説話は、ある時期に文字で記録されて広く読まれ、読んだ人から口頭で伝えられた人々がそれを語り継ぎ、ある時点でそれが再び記録される、ということを繰り返してきた。このように口頭伝承と書籍による伝承とは、相互に補完し合い、手を携えてきたのである。

この「手なし娘」というメルヘンが全世界に流布しているのは、口承文化と文字文化の間を行き来しつつ時代・地域を超えて「旅」をしてきたからであると言える。

はじめに

南蛮文化の伝来とともに、鹿児島と長崎に伝えられた「手なし娘」の物語が、戦国期から江戸時代を通じて、広く日本の隅々にまで伝播した経緯と経路、日本バージョンへの変容の諸形態については、すでに前稿において詳細に論じた[1)]。本稿では、当該メルヘンの発祥の地、ヨーロッパにおける伝承の系譜を、書籍伝承の面から、遡りうる限り辿り、その起源を探ることを目的とする。こ

*大妻女子大学　社会情報学部

の場合、19世紀初頭に採話され文字によって記録された『グリム童話集』、同世紀中ごろに採録されたアファナーシェフ版『ロシア民話集』、20世紀になってからのエスピノーサ版『スペイン民話集』など、採録の新しいものは考察の対象から外した。

1．17〜16世紀のイタリアの書籍伝承

この物語のルーツ探しを、時代を遡って検討してみようとする場合、それは、『グリム童話集』以前にすでに採話されて、書籍のかたちで残されてきた伝承例を、手掛かりとすることになる[2)]。

1．1　両手を切断して兄に差し出したペンタ（付表通番⑧）

17世紀前半、バジーレの手になるイタリアの民話集『ペンタメローネ（五日物語）』の第３日第２話に、つぎのような「手なし娘」の話が収められている。

ピエートラセッカの王は妃に先立たれ、実の妹ペンタを後添いに迎えようとする。兄が妹に執着したのは、ペンタが美しい手をしていたからであり、彼女はその病的なまでのフェティシズムに恐れをなす。兄の邪な欲望から身を護るため、ペンタは自らの両手を奴隷に切断させ、これを鉢に入れ絹布に包んで兄に差し出す。兄の逆鱗にふれたペンタは、木箱に押し込められ海に流されてしまう。

ペンタは船乗りのマスィエッロなる男に救われ、いったんは彼の家に迎え入れられるが、船乗りの妻ヌッチアの嫉妬から、再び海に流されてしまう。こんどはテッラヴェルデの王がペンタを救いあげ、城に連れ帰って王妃に仕えさせる。両手の無いペンタであったが、彼女は侍女として裁縫、糊づけ、髪結いなど、なんでも足で上手にこなしたので、王妃からは我が子のように可愛がられた。やがて王妃は病の床につき、死に臨んでペンタを後添いにするよう言い遺してこの世を去る。

テッラヴェルデの王は前妻の遺言どおりペンタと再婚し、彼女は王の海外出征中に第一子を産む。王子の誕生を知らせる手紙を運ぶ使者は、途中遭難し、船乗りの妻ヌッチアのもとに漂着する。ヌッチアは使者の話を聞いて、ペンタの幸せな身の上を知り、その運勢に嫉妬し、手紙を近所に住む学生に頼んで「化けもの犬が生まれた」と書き替えてしまう。

王は、手紙が改竄されたとも知らず、心を痛めはするものの「神のおぼしめしであり、悲しむことはない」との返書を使者にもたせるが、これもヌッチアの手で「母子とも火刑に処すべし」という内容に書き替えられてしまう。

留守を預かる長老たちは、この手紙について議論した末、ひそかに母子を城外に逃し、ペンタは自分の乳と涙で赤ん坊を養う。ペンタ母子の身の上に同情したラゴトルビート王は母子の守護を約束する。この王はペンタを不幸にした二人の王（実兄と夫）を呼び寄せるべく、世界一不運な男の身の上話をした者に、王国を譲るとの御触れを各地にだした。

ペンタの夫でテッラヴェルデの王は帰還するや、事情を知って激怒し、船乗りの妻ヌッチアを火刑に処し、妻子探索の旅に出る。途中でピエートラセッカの王（ペンタの兄）に出会い、二人してラゴトルビート王国に向かった。ペンタの兄と夫は、ラゴトルビート王の前に出て、それぞれの身の上話をし、やがてペンタ母子との再会が果たされる。魔法使いでもあったラゴトルビート王は、ペンタに両のかいなを前掛けの後ろに入れてから前に突き出してごらんと命じる。彼女がそうしてみると、まるで手品のように両手が甦っていた。魔法使いの王は、御触れのとおり、王国をテッラヴェルデ王に与えた。

1．1．a　文献解題と若干の解説

1634年にバジーレによって出版された『物語のなかの物語、すなわち幼いものたちの楽しみの場』は、この物語集のモデルとなったボッカッチョの『十日物語』にちなんで『五日物語』、すなわち『ペンタメローネ』と呼ばれている。ヨー

ロッパにおける最初の本格的な民話集で、「白雪姫」・「シンデレラ」・「長靴をはいた猫」など、後にシャルル・ペローやグリム兄弟によって取り上げられた物語の原形とされる物語が、数多く採録されている。この本は、しかし、バジーレの生地ナポリの方言で書かれていたために、長い間、原典で読むことが困難であったという。

この物語は「近親姦型」に分類されてきたが、ここには兄が妹の美しい手に執着するという、ある種のフェティシズムが基調にある。近親姦の罪から逃れようとした妹のペンタは、奴隷に両手を切断させ、これを鉢にいれ絹布に包んで兄に差し出すという、なんとも凄惨なかたちで兄の異情な情欲を拒絶している。

テッラヴェルデの王は、妃の遺言に従ってペンタを後添いに迎えている。妃はもちろんのこと、王もペンタの両手が無いことを問題としていない。むしろ手の代わりをする足の器用さが特筆されているほどであり、このあたりの描写は、ペンタの兄の手に対するフェティシズムとは対照的である。

やっとつかんだ幸せは、しかし、船乗りの妻ヌッチアによって壊されてしまう。ヌッチアがペンタを再び海に流したのは、その美しさゆえに、夫の愛を奪われはしまいかという、単なる嫉妬からであった。ここまでは理解もされようし、場合によっては許されもしよう。しかし、ヌッチアが、幸せをつかみかけたペンタやテッラヴェルデ王の手紙を改竄したのは、他人の身の上に嫉妬したからにほかならない。ヌッチアは、その業の深さと改竄がもたらした深刻な結果のゆえに、火刑に処されてしまう。

このバージョンではまた、ペンタの両手はラゴトルビート王の魔法の力によって再生している。他のバージョンではキリスト教会の教皇や聖人による奇蹟、樹木や清水にまつわる奇蹟譚が多いなか、カトリック信仰のお膝元イタリアのナポリのバージョンが、世俗の王の奇跡を起こす力を持ち出している。これは、ナポリを支配したアンジュー家が、王には神秘的な力が宿るとした故地フランスの観念を、南イタリアに持ち込んだ結果と解することができる。

1．2　私の指輪がぴったりあう女性と再婚して（⑦）

バジーレが下敷きにしたと思われる物語がある。それは、16世紀の中ほどにストラパローラが著わした『楽しき夜毎』という2巻本に収められている「テバルドの話」である。ストラパローラは、おそらく当時のイタリアで広まっていた、口承の民話を書き留めたと推測されている。概要は以下の通りであるが[3]、私どもはこうして、「手なし娘」のルーツをさらに1世紀遡らせることができるのである。

サレルノの侯爵テバルドの夫人が死の床で、夫にむかって、自分の指輪がぴったり嵌まる指の女性を捜し出して、後妻に迎えるよう遺言してこの世を去る。テバルドはそんな指の女性を捜し回るが、虚しく時が過ぎ去ってゆく。ある時、娘のドラリーチェが、母親のその指輪を見つけて何気なく指に嵌めてみると、驚くほどぴったりとおさまった。

「ねえ見て、私の指にはこんなによく
　嵌まってよ」

侯爵はそれを見て、娘に異様な欲情を抱くようになってしまう。娘はびっくりすると同時に、これを拒んだときの父親の怒りを考えて恐くなり、乳母に相談をもちかける。乳母は、ドラリーチェを亡き母が遺していった立派な長持ちに隠すが、侯爵は姿をくらました娘に死を宣告し、亡妻のこの遺品を、なかに娘が潜んでいるとも知らずに、市場で売り飛ばしてしまう。

この長持ちは、ジェノバ市の商人に買い取られ、それはさらにブリタニアに向かう船に積み込まれた。そして、ブリタニアのある王がこれを購入して自室に備えた。長持ちのなかにいたドラリーチェは、王の留守中に出てきては部屋を整理し、ベッドメイキングをして枕を二つ整え、部屋のあちこちに花を撒いておく。

王はやがてドラリーチェが長持ちから出てきたところを捉まえる。彼女は身の上話をするが、自

分の名前は忘れたと言い、二人はまもなく結婚をし、二人の男の子を授かる。

父親テバルドは、やがて、売り払った長持ちにドラリーチェが隠れていたのだろうと気づき、ジェノバの商人にその売却先を問いただす。テバルドは商人になりすましてブリタニアに向かい、娘の嫁いでいる王宮に入りこみ、機織りと糸巻き棒をかたどった金製の装飾品を披露する。ドラリーチェが、父親とも知らず、この品を所望すると、彼はお金では売れない、可愛い二人の男の子の側に添い寝をさせてくれれば、ただで差し上げましょうと申し出る。ドラリーチェは少しも疑わずにこの申し出を受け入れてしまう。

みんなが寝静まった頃、テバルドは娘の寝室に忍び込んで短剣を盗みだし、これで二人の子を殺害する。彼は、短剣をもとのところに戻し、王宮を逃げ出す。やがて事件が明るみに出て犯人探しとなり、ドラリーチェがわが子殺害の下手人とされてしまう。激高した王は彼女を裸にして首まで穴に埋め、虫に喰われる刑に処すことにした。この責め苦を長いあいだ受けさせるために、彼女には日々食事が与えられた。

帰国したテバルドから一部始終を聞いた乳母は、ブリタニアに急行し、王にドラリーチェの無実を訴える。こうして彼女は間一髪のところで乳母に救われる。王はサレルノに遠征してこれを征服し、彼女の父テバルド侯爵を捕らえて四つ裂きの刑に処し、その肉を犬に与えたということである。

1．2．a　文献解題と若干の考察

ストラパローラは、北イタリアのカラバッジョに生まれ、1530年から40年までベネチアに住んだ。ソネット、詩編、書簡などのほかに、方言を交えた民話集『楽しき夜ごと』（第一の書、1550年刊。第二の書、1553年刊）を著した。ボッカチオの『デカメロン』に倣って、ベネチアのムラーノ島を舞台に、13人の女と多数の男たちが、75編の物語を13夜のうちに語り継いでいく形式。ヨーロッパ最初の民話集としての価値は大きいとされる。

この物語には両手の切断もなければ、手紙の改竄もなく、したがって両の手が蘇る奇跡も起きていない。ただあるのは、父親の娘に対する性的な欲望と、その欲情が手や指にむかっているというフェティシズムである。バジーレの『ペンタメローネ』では、妹の美しい手に注がれた視線は、手や指に執着を示す兄の眼差しであったが、こちらでは、死別した妻の指に嵌められていた指輪への想いがあって、実の娘の美しい指に、父テバルドの熱い眼差しが注がれている。父親は娘を犯したいという激しい欲望を抱き、娘はこれをなんとしても拒もうとする。その結果として、娘は家を出、彷徨ののちに幸せな結婚と出産を経験するというものであった。しかしそうした人並みの人生が、悪鬼と化した父親によって再び破壊される。テバルトは、孫にあたる二人の男の子を殺害して娘をも窮地に陥れた、人非人である。女主人公は、生命さえも危ういものとされるなか、乳母の機転によって、一転光明がさしてくるという展開である。

ところで、この物語のなかには興味深い部分がある。商人に変装したテバルドが、娘の前に機織りと糸巻き棒を示しているところである。フランク時代に通用していた『リブアリア法典』には、親の意志に背いた結婚を望む娘の前に剣と紡錐が置かれ、娘が剣を選べば父親の親権のもとに戻ることを、また紡錐を選べば自分の意志を貫くことを意味する規定があった。テバルドがドラリーチェの前に、機織りや糸巻き棒をかたどった黄金製の装飾品を示したのも、彼女がそれを所望したのも、こうした法故事と無関係ではない[4]。

また、ドラリーチェが穴に埋められて死を待つばかりの刑を受けているが、これは中世期の西欧世界で実際に行なわれた刑罰のひとつであった[5]。

2．15～13世紀のイタリアとフランスの書籍伝承例

14世紀には、「手なし娘」に類似した物語がヨーロッパ各地に流布・伝播していたせいもあって、書籍のかたちでの伝承がかなり存在する。

ウィーンでもジャンセン・エニケルの手になる『世界年代記』が編まれ、そのなかにロシア王女を主人公とする類似の話が収められているということである[6]。「手なし娘」に関する書籍伝承をたどる旅は、こうして、現代から600～700年も遡ることになる。

2.1　コンスタンチノープルの皇女、美わしのエレーヌ（⑥）

14世紀末から15世紀にかけてフランスで書かれた『武勲詩』にも、よく似た構成をもった話が収録されている。

コンスタンチノープルの皇帝アントニオは、実の娘エレーヌに道ならぬ恋心を抱いてしまい、教皇の許しをえて妻に迎えようとする。しかしエレーヌは、結婚式の直前になって船でフランドルに逃れ、修道院に身を隠す。皇帝がなおも王女を追い続けたため、エレーヌはフランスを経てイギリスへと逃亡生活を続ける。エレーヌはそこでイギリス王ヘンリーに出会い、二人はやがて恋に落ちて結ばれる。ヘンリーの母は、しかし、この素性を明かさない女エレーヌとの結婚に反対し続けた。

ヘンリーとエレーヌは幸せな日々を送っていたが、その頃イスラムの軍勢がローマを陥れ、教皇はイギリス王に救援を求めてきた。ヘンリーはこれに呼応して、軍勢を率いて海峡を渡った。エレーヌは、王の留守中に双子を産み、これを王に報せる手紙を用意するが、手紙は姑（王母）によって二匹の仔犬を産んだと書き替えられてしまう。王はそれでも自分が帰宅するまで大事に育てるようにとしたためるが、姑はこの息子からの手紙をも、王妃と二人の息子を焼き殺すようにと書き替えてしまう。

母子の殺害を命じられた留守居役の公爵は、しかし、殺すことができず、王妃の右手を切り落とさせて、一人の王子の首にその手をしばり付け、母子を櫂の無い小舟に乗せて海に流す。公爵は、王母の命令が実行されたことを示すために、自分の姪の左手を切り落としてエレーヌに見せかけたうえで、公開の場で火刑に処した。

漂流ののち母子を乗せた舟は座礁し、そこで息子二人は誘拐されてしまい、エレーヌはナント市に漂着する。息子たちはその後、ある隠者に保護される。

王は戦が終わって帰宅し、公爵から事の成り行きを知らされて、母親を処刑したうえ、妻子探索の旅にでかける。コンスタンチノープルの皇帝もまた、娘のエレーヌを長年にわたって探しつづけていた。さらに二人の王子たちも母を探してトゥールにやってくる。彼らはここで、大司教マルタンによる洗礼を受けて、大司教に仕える身となる。父と夫と息子たちが探し求めていたエレーヌもまた、放浪の旅の末にトゥール市にやってきた。王子の首にしばり付けられていたエレーヌの右手が、息子たちとイギリス王ヘンリーとの再会をもたらす切っかけとなる。その後、エレーヌも見つけだされ、聖マルタンの奇蹟によって、右手がくっつけられた。

2.1.a　文献解題と若干の解説

この物語の成立年代は、かつては12世紀とされていた。決め手とされたのは、物語に出てくる十字軍の話と、武勲詩なるものを詠唱して歩く吟遊詩人の活動の開始時期とであった。しかし、口頭伝承の始まりを特定することは難しく、この物語を収録した最古の書籍伝承が、14世紀末のフランスで書かれた『武勲詩』であることから、本稿では書籍伝承上の位置づけを14世紀末から15世紀としておく。

以下の内容紹介は、ミヒャエル・ハインツェが『メルヘン百科事典』に寄せた要旨によった[7]が、三原幸久の「昔話＜手なし娘＞の伝承と伝播」にも要約がある。

物語の時代背景は、書物が著された時代より200年ほど前の、十字軍時代である。第四回十字軍は、聖地回復という当初の目的を失い、ビザンツ帝国のコンスタンチノープルを包囲し、陥落させてしまう（1203－04年）。この時代は、ギリシア正教会のビザンツ＝東ローマ帝国をも巻き込んだ、イスラム教徒との軍事的対峙の時代であり、

登場人物の行動範囲は、コンスタンチノープル・フランドル・フランス・イギリスに及んでいる。物語の舞台は、そうした時代に相応しくインターナショナルな広がりをもっている。

エレーヌは父親の邪悪な性欲から身を護るために生家を出、父王もエレーヌを追跡した。このことが結果的には、エレーヌとイギリス王ヘンリーとの出会いをもたらしてくれた。イギリスの王妃に迎えられたエレーヌは、氏素性を明かさなかったためもあって姑に嫌われ、焚刑に処せられることになった。家臣の計らいで死は免れたものの、右手が切断された。これは、王族としての資格がエレーヌから剥奪されたことを意味している。

王子の首にくくり付けられた、この切断された右手は、のちに王子たちと父王との再会をもたらすための重大な伏線とされている[8)]。

主君たるヘンリー王の妃エレーヌの命を救うために、公爵は自分の身内の者を犠牲に差し出した。ここには、ヨーロッパの封建時代における封臣の主君に対する忠誠心が、誇張された形で表現されている。

物語の発端はビザンツの帝都コンスタンチノープルであり、A. H. クラッペによれば、エレーヌ＝ヘレーネという人名は、中世期のイングランドでは知られておらず、フランスでも13世紀以降に本格化するレヴァント定住後に、やっとポピュラーになる名前であり、人名の点からすると、この物語の起源はビザンツ世界にあるとされた[9)]。

2.2 『カンタベリ物語』(⑤)

チョーサー（1340～1400年）の『カンタベリ物語』には、「法律家の話」のなかに、「手なし娘」に似た次のような話がくり広げられている。

主人公クスタンスは、ローマ皇帝の才色兼備の王女として誉れ高く、この噂を聞き知ったシリアのイスラム教の王（サルタン）は、是が非でも妃にしたいと思うようになる。サルタンは枢密顧問官を呼んでこのことを評議させる。宗教の違いが障害になるとの意見が相次ぐなか、サルタンは自らキリスト教へ改宗するとともに、全王国民の改宗も命じた。その上でサルタンは莫大な黄金をローマ皇帝に提供しつつ、クスタンスとの結婚を申し入れる。クスタンスは異教徒の国へ嫁ぐにあたって、父王に次のように言う。

「女は、生れながらにして奴隷であり、
苦行を課せられている者でございます。
女は、人の支配をうけるために
生れてきたものでございます」

クスタンスはこう言って、たくさんの供揃いを従えて、見ず知らずの異教の地に嫁いでいった。

ところが、伝統的なイスラム教を護ろうとするシリア王の母后は、顧問官全員を味方につけ、ローマからの一行を迎える饗宴の席で、クスタンスを除くキリスト教徒全員を虐殺してしまう。クスタンスだけは舵のない小舟に乗せられ、海に流される。彼女を乗せた船はギリシアの海を渡って、モロッコ［ジブラルタル］海峡を通過して、やがてグレートブリテン島のノーサンバーランドに漂着する。

クスタンスはある城主夫妻に救われ庇護を受け、城内の人たちにも愛されるようになる。彼女は城主夫妻がキリスト教信仰に入る手助けをし、ウェールズに逃げ込んでいた、古のキリスト教徒たちとも交わる。

やがてクスタンスに想いを寄せる騎士があらわれ、彼女に言い寄る。しかし、その想いが受け入れられないと知ると、彼の愛は一転恨みに変わる。彼は夜陰に乗じて城主夫人を殺害し、その嫌疑をクスタンスにかけようと、凶行に用いた短剣をクスタンスの乗ってきた船のなかに隠す。短剣が発見され、騎士の証言もあって、クスタンスに嫌疑がかけられてしまう。彼女を知るだれもがそんな容疑を信じないのだが、反証がない。そこでこの件は、ノーサンバーランド州の王アラの前で、神盟裁判によって決せられることとなる。ブリトン語で書かれた福音書が運ばれてきて、騎士はその聖書にかけて、クスタンスが犯人であると誓うが、そのとたんに片方の手が現れて、騎士の首の骨を折ると、騎士は石ころのように倒れ、両眼が眼窩から飛び出したという。神判が下ったのであり、居合わせたアラ王も大勢の人たちも、こ

の場でキリスト教に帰依した。

王はこの神聖な処女を妻として迎えたという次第。しかし、アラ王の母后は、息子と外国女との結婚をけしからぬと考えていた。王がスコットランドに出征中、クスタンスは王子を生み、その喜びの手紙が夫のもとに出される。これを王母が盗みとり、「女王は、恐ろしい鬼子を産んだ」という内容に書き替えてしまう。これを読んだ王はそれでも「私が帰るまで、その子と妃とを守ってください」と記した返事を出している。これも王母の手で「クスタンスの乗ってきた船に、母子とその荷物とを乗せて、陸から突き放すがよい」とされてしまう。母子を乗せた船は荒海を越えて、やがて地中海に入る。

そのころ、クスタンスの父であるローマ皇帝は、復讐のため、諸侯や元老の率いる軍勢をシリアに派遣し、これを無惨に討ち滅ぼした。その帰還するローマ軍の元老のひとりが、漂流するクスタンスの船に偶然出会い、母子を救出する。

他方、アラ王は、スコットランドから帰国して一部始終を知り、陰謀の首謀者であった母親を殺害する。彼は悔いるところがあったので、贖罪をして神の赦しをえようと、ローマに詣でる。ここでくだんの元老の家に招かれ、妻子と劇的な再会を果たす。さらにアラとクスタンス、それに息子マウリシウスは、皇帝に拝謁する機会をえる。死んだと思って諦めていた愛娘との再会に、皇帝は狂喜する。

しかし、人生には、どこでどんな不幸が待ち受けているかわからないもので、一年もしないうちにアラ王がこの世を去る。クスタンスはイングランドを去ってローマに戻り、父のもとを二度と離れなかったという。マウリシウスは、のちに教皇の手によって皇帝の位についた。

2．2．a　文献解題と若干の考察

イギリスのチョーサー（1340～1400年）によって著された『カンタベリ物語』は、聖トマス・ベケット廟があるカンタベリ大聖堂への巡礼の途中、たまたま宿で同宿した様々の身分・職業の人間が、旅の退屈しのぎに自分の知っている物語を順々に語っていく形式を取っている。各人が語る物語のジャンルは、武勲詩＝騎士道物語（ロマンス）、ブルターニュのレー、説教、寓話、ファブリオーと様々である。本書はボッカッチョの『デカメロン』と同じ構造で、チョーサーは以前イタリアを訪れた時に『デカメロン』を読んだと言われている。なお、「法律家の話」は、1387年頃に中世英語で書かれたと言われている。

この物語には手の喪失と再生という重要な部分はないが、主人公の苦難に満ちた人生や手紙の改竄など、「手なし娘」の物語とあい通じるものがたくさん含まれている。また、この物語では、キリスト教とイスラム教の厳しい対峙の状況が、ストーリーのなかに鮮明な形で投影されている。シリアの王母によるキリスト教徒の虐殺に対して、ローマ皇帝は酷い復讐戦をくり広げる。イスラムの王族の男女がキリスト教世界の美女や凛凛しい騎士に恋する題材、あるいは両宗教世界が激しい戦闘を繰り広げる題材は、西欧の中世における武勲詩で好んで取り上げられた。

またこの物語には、いくつかの歴史情報が潜んでいる。アラ王のモデルとなったのは、実在のノーサンバーランド王アラ Ælla だとされる。ウェールズに逃げ込んでいたキリスト教徒とかブリテン語で書かれた福音書―ウイクリフによる聖書の英訳は1378年のことである―、アラ王のキリスト教改宗、あるいは彼によるスコットランド遠征、さらには神盟裁判や神の手、教皇による皇帝戴冠に関する情報も見て取れる。

ルーツを辿って時代を遡れば遡るほど、ストーリーは近・現代のそれとは違ってくるが、逆に時代を感じさせる種々の歴史情報が豊富になってきてもいる。

2．3　フィオレンティーノの『イル・ペコローネ』（④）

イタリアのフィオレンティーノの手になる『イル・ペコローネ（愚者）』の十日目第一話に、フランス王女を主人公とした次のような話が収められている[10)]。

欲に目が眩んだフランスの王は、王女を70才という高齢の、大金持ちの領主に嫁がせようとする。王女はこれを拒絶し、変装してイギリスに遁れ、尼僧院に身を隠す。イギリスの王がこの尼僧院を訪れ、王女と出会い、結婚する。王母はこの結婚に反対し、嫁に敵意を抱く。王が出征中に、主人公は双子を出産するが、これを報せる手紙は、王母によって「二匹の子猿を産んだ」と書き替えられてしまい、王の返書もやはり王母によって「母子ともども直ちに殺せ」という内容に替えられてしまう。

母子は、同情した代官によって港に案内され、ジェノバ行きの船に乗り、ローマに辿り着く。彼女は二人の子どもに学問を学ばせ、彼らはやがて教皇の廷臣となる。まもなく時の教皇がイスラム世界に向けた十字軍を派遣しようとして、キリスト教世界の各国の王をローマに召集する。

この間、イギリス王は事の真相を知って、母親を殺害させる。またフランスでは、あの強欲な父王が亡くなり、主人公の兄が王位に即いていた。この英仏二人の王が、教皇の召集に応じてローマにやってくる。女主人公は教皇のもとを訪れ、夫や兄との対面をかなえてくれるよう頼み、受け入れられる。教皇の面前で二人の王との再会を果たした母子が、最後には夫とともにイギリスに戻り、幸せをつかむ。

2．3．a　文献解題と若干の解説

セル・ジョヴァンニ・フィオレンティーノは、ボッカチオの『デカメロン』(1344年）を模倣して『イル・ペコローネ（愚者)』という小話集を書いている（1378〜1385年)。最初に印刷・出版されたのは、1558年、ミラノにおいてであったという。

フランスの王はよほど金に困っていたのか、王女を高齢な金持ち男性と結婚させようとした。王女はこの結婚話を拒否すると、さっさとイギリスに渡り、尼僧院に入ってしまう。中世にはよくあった政略結婚の一種であり、要するに父親が娘を道具として使おうとしたわけである。こんなことは、家長権の強かった前近代の社会ではざらにあったようで、政治的なライバルや金貸し＝悪魔に、実の娘を売り渡そうとしたメルヘンは『グリム童話集』にもいくつか見出せる。そんな時代の女性は、たいてい、父親の言うがまま、なすがままに従ったのであろう。それを拒んだからこそ、彼女たちの生涯は語り継がれるに相応しいものとして、中・近世を経て現代にまで伝えられてきたと考えて良い。なお、この物語にも両手の切断という場面はない。

物語の歴史的背景は、十字軍の時代であり、ギリシア正教会のビザンツ＝東ローマ帝国をも巻き込んだ、イスラム教徒との軍事的対峙の時代であり、物語では西欧諸国の王宛てにローマ教皇による出軍要請があって、登場人物の行動範囲は広域に及んでいる。

2．4　わたしとよく似た女性と再婚して（③）

フランスのボマノアール伯爵（1246/47〜96年）が、1270年頃に以下のようなストーリーの『ラ・マヌキーヌ』という作品を書いている。

ハンガリーの王と王妃のあいだには、一粒だねの王女ジョイがいたが、やがて王妃は重い病の床に臥す。王位の継承が女児のジョイに認められない場合のあることを予測して、王は臨終の床にある妻に向って、その場合には別の女性と結婚して嫡男をえなければならないと話す。すると王妃は

「非の打ちどころのないほど自分によく
似た女性と再婚してください」と告げる。

王は妃の死後、そういう女性を捜してはみるが、なかなか見つからず、母親によく似た実の娘のジョイが、後添いの候補として浮上してくる。王は初めのうちこそ拒みはしてみるものの、周囲の者たちの強い勧めがあり、司教の特別の許しも出たため、その気になりはじめる。王はジョイを訪ね、その愛らしくもか細い手を掴んで、母親との約束のことを説明し思いの長けを告げた。

ジョイは父王の気勢をそぐために、自分の左手首を切り落とし川に流しさるという非常手段に訴える。この国には、王族は身体に欠損のある女性を妻とすることができないという法があったから

にほかならない。これに激怒した父王は、ジョイを火刑に処するように命じるが、同情した家来がジョイをマストも帆もない小舟に乗せて、海に逃がした。

スコットランドに漂着したジョイは、そこの王に見初められる。彼女は自分の不幸についてはいっさい語らず、周囲の人々の愛情を呼び覚まし、また非のうちどころのないほどの美しさを取り戻していたので、「マヌキーヌ」と呼ばれるようになる。王はやがて母后の反対を押し切ってジョイを妻に迎えるが、母后はマヌキーヌを脅迫し呪詛する。

しばらくしてから王は、騎馬試合に参加するためにフランスに渡り、その間にジョイは男児を出産し、このことを夫に手紙で知らせようとした。しかし、この手紙は、母后の策略にかかって、ジョイがまるで化け物のような、獣のように毛深くて頭の大きな子を産み落としたという内容にすり替えられてしまう。王はこの偽りの手紙を受けとり悲しむが、ともかく自分が帰国するまで家臣は母子を大切にせよとの返書を送る。母后はこの返書をも、母子を火刑に処するようにとの命令書にすり替えてしまう。しかし、ここでも、ジョイに同情する家臣らは、二体の木製の人形を作らせて燃やし、母后の目を誤魔化す。彼らは母子をマストも帆もない小舟に乗せて流し、ジョイはスコットランドに来たときと同じようにして、この地を離れることになった。小舟は地中海に入り、母子はローマ市に通じるテベレ川の川口に漂着し、ここで彼らはローマの元老院議員に救けられる。

スコットランドの王は帰国して事情を知り、母后を幽閉したのち、妻子探索の旅に出る。７年もの探索の末にローマにやってきた王は、やっとのことで王妃と再会を果たす。片手のジョイはまた、罪業を悔いて教皇の特赦を乞いにやってきていた父＝ハンガリー王とも再会し、父娘の和解を果たす。

さらに、ジョイがみずから切り落として川に流したはずの左手首が、とある泉で発見され、しかも教皇の祈りが神に聞き届けられて、それはジョイの腕に元通り接着したのであった。

２．４．a　文献解題と若干の解説

フランスの貴族でボマノアールの伯爵フィリップ・ド・ルミ（1246／47～96年）という人が、1270年頃に『ラ・マヌキーヌ La Manekine』という文芸作品を書いている。この作品については、新倉俊一が「中世の『近親相姦』伝承」（『ヨーロッパ中世人の世界』筑摩書房、1983年）のなかで詳しく取り上げており、またヴァルター・シェルフの『メルヘン事典』にも詳細な内容紹介がある[11]。

ボマノアール伯爵は、若い頃イギリスに滞在したのち、二編のロマンを韻文で書いており、『ジャンとブロンド』などの物語作家としてもつとに有名であった。彼はまた、詩人としても特異な才能を発揮し、２万以上もの詩句を残している。その後、父親と同じ裁判官の道に入り、法学者として、ルイ九世の知遇をえて大法官をつとめるいっぽう、多数の都市で巡回裁判を主宰している。彼が編纂した『ボヴェジ慣習法書』（塙浩訳、信山堂）はフランス中世法の研究を進めるうえで、たいへん貴重な史料である。

『ラ・マヌキーヌ』という物語は地理的にみると、ハンガリー、スコットランド、フランス、ローマなど文字通りヨーロッパを舞台として展開されている。ハンガリーの王がローマ教皇からの罪の許しを受けるためにローマを訪れていることや、ハンガリーの川に流された左手首がローマのとある泉で発見されたという話、その左手が教皇の祈祷によって元通りに接着したという奇跡は、ハンガリーとローマ教会とのつながりの深さを示している。

ハンガリーの王がローマン・カトリックに帰依したのは、10世紀の末から11世紀にかけて王位にあったイシュトヴァーン一世聖王の時代のことであり、西欧のベネディクト会やシトー会との関係も密であったようである。ハンガリー王国は、しかし、ボマノアール伯がこの物語を書いた少し前、1241年にはモンゴルの侵攻に屈して崩壊してしまう。時代状況はこのようなものであったが、

物語の歴史的背景を了解しておくと、この物語の理解はいっそう深まると思われる。

父王の実の娘にたいする許されざる欲望は、亡き妻との約束、王位継承法や家臣らの推挙、司教による是認を経て合法的とされ、ジョイは追い詰められる。しかし彼女は、父王の意に従うくらいなら死んだほうがましだと思い、父王が執着をみせた自分の手を切り落とすことによって、父王の要求を拒絶した。ジョイの行為は、王や王妃となる者は五体満足でなければならないとする、この国の法律によって裏付けをえている[12]。彼女は我が身の一部分を切り落とすことによって、王妃の座につくことを拒絶したというわけである。

彼女はこうまでしなければ父親の誤った欲望＝近親姦の罪業から、我が身を護ることができなかったのである。しかし、そもそもの原因は、母親が父親に言い残した遺言であって、それが王の心を呪縛し、実の娘を不幸に陥れる結果を招いたのであって、ジョイには何の責任もない。そうであるいじょう、家臣たちの同情が集まるのも当然であったと言える。

ハンガリーからどこをどう漂流したのかは定かではないが、ジョイが乗った舟が漂着した先はスコットランドで、そこで彼女は王妃に迎えられている[13]。

3．12世紀およびそれ以前の書籍伝承

十字軍遠征をきっかけとしたヨーロッパ世界とイスラム世界との接触によって、文物の交流がさかんになり、説話類の伝播や受容が双方ともに活発になされた。

本稿の主題である「手なし娘」の話は、イスラム世界や東西ヨーロッパの各地に広く分布している。それは当初、口頭伝承のかたちで語り継がれたものであろうが、イスラム世界でもヨーロッパでも、12－13世紀ころには早くも文字で記録されはじめたようである。口頭伝承が書籍の形をとる際に、歴史的事実や国名、地名や人名が附加され、あるいはストーリー展開が複雑なものとされるなど、物語の奥行きと広がりが増幅される場合が多い。

アラビア＝イスラム世界にも『千一夜物語（アラビアン・ナイト）』の「手のない妃」という、「手なし娘」に似た物語がある。『千一夜物語』の最古の部分は西暦10世紀のころに集大成されたといわれている。これにアッバース朝（750～1258年）下の都バグダッドを中心とする諸都市のカリフ、貴族、商人らの物語、ペルシャ湾海港都市で活動する船乗りが持ち帰った外国土産の物語、エジプトのカイロやアレクサンドリアを舞台とする物語、十字軍時代の物語などが次々につけ加えられ、15世紀頃には現在に伝えられているような形に集大成されたと考えられている。このなかに、次のような「手のない妃」の物語が収められている[14]。

ある美しい婦人が、他人に施し物をしてはならぬとする王の禁令に反して、乞食に二個のパンを恵んでやった。このことが王の耳に入り、婦人は連行されて両手を切断されてしまう。王はしかし、間もなく母后の勧めもあって、この美貌の婦人を妃としてハーレムに迎え入れる。

王の不在中に、他の妻たちはこの手の無い女性を妬み、やれ姦婦だの、やれ「かつて男児を出産したことがある」だのと言い立てる。この女性をめぐって生じたハーレム内での混乱を収拾できなくなった母后は、その旨を王に手紙で知らせる。王はやむなく母后宛てに、手のない妃を「砂漠に連れていき置き去りにするよう」書き送る。

こうして手のない妃は、王の不在中に子供ともども砂漠に放り出されてしまう。肩に童子を乗せて放浪するうちに、一筋の水流のほとりに出た彼女は、水を飲もうとして子を水中に落としてしまう。彼女がなす術もなく泣き崩れていると、二人の男性が現われてアッラーに祈りの言葉を捧げ、子供を救出してくれたうえに、彼女の両手を再生してくれた。この二人の男性は、彼女が乞食に与えた二個のパンの化身であった。彼女の両手が失われた原因が二個のパンであったところから、アッラーの神がパンを男性に変えてこの世に送り込んだという次第。

貧しい人や病人に施しをしてはいけないという命令を発するというのは、きわめて稀で異状な事態で、そんな悪法をつくる王は、よほど不信心で国民にはえらく不人気だったはずである。しかも施し物をした女性の両腕を切り落とすなど、常軌を逸しており、王の精神の異常さを感じさせる話である。こんな王は早晩天罰を受けずにはおかないであろうし、そうならないまでも、そうした王の禁令は、人々の倫理感や道徳観によって打ち破られていくものである。

この物語のなかでは、慈悲の心をもったひとりの美しい女性が、信仰心の無い王の命令によって両手を切られてしまう。しかし王母はやがて、息子の過誤、罪深きことに気付き、罪滅ぼしのためにも両手のない女性を妃に迎えるよう息子に勧める。王もまた自らの過ちを悔い改め、彼女を妃に迎えることで幾分かは救われたのであろう。

しかし、アラビアの世界では一夫多妻制がおこなわれていたので、あとからハーレムに迎え入れられた両手のない妃は、他の妃たちに散々いじめられた。そのなかには「姦婦」だの、王以外の男性の子を産んだことがあるだのといった中傷・誹謗の言葉があり、上を下への大騒ぎとなってしまう。留守を預かる母后も、古手の妃たちの讒言に惑わされてしまい、遠隔の地にあった夫である王も、なす術もなく結局は手のない妃を砂漠に放逐してしまう。

ここまでのストーリー展開はいささか不自然である。王の禁令は、イスラムの教えに反するものであったが、悪法も法で、違反した女性は両手を切断されている。身体切除の刑罰を下しておきながら、この女性を後宮に迎え、そうしたかとおもえば、一転、母子を砂漠に放逐している。

川に落ちた彼女の子供を救出し、また彼女にもう一度両手を授けてくれたのは、アッラーの神であった。この母子がその後どのような生涯を送ったのかは物語られていないが、ハーレムに戻ることがなかったことだけは確かなようである。

このイスラム世界に広く流布していた物語が、十字軍遠征やレパント貿易によって西欧世界に持ち込まれた可能性は否定できない。

3．1　昔々イングランドに……（②）

ヨーロッパでは12世紀以降、「手のない娘」の話が詩や戯曲、散文の形で、文字で記録されてきた。いまのところ最古の類話とされているのは、12世紀にラテン語で記された文献『オファ王の生涯の物語』である[15]。これはイングランドの『聖アルバン修道院年代記』に含まれており、オファ一世王の生涯に修道院建立の経緯が織り込まれる形式を取っている。書き留められたのが12世紀ということであるから、口承説話としては、もっと古くから語り継がれていたとする説もあるが、確認する術はない。ストーリーは次のようなものである[16]。

昔々イングランドにまだ統一王権が生まれず、混沌としていた頃の話である。ある時、ヨーク侯が実の娘を妻にしようとして関係を迫るが、娘はこの不自然な要求に同意しない。王は腹立ち紛れに、娘を森のなかで殺害し獣に喰わせてしまえと命ずるが、同情した配下の者が彼女を生きたまま、森に置き去りにしてきた。

その森にマーシアの王オファが狩猟のためにやってきて、この見目麗しい王女に出会い、一目惚れしてしまう。王は、高官の同意を得ることもなく、この娘と結婚をし、たくさんの子宝に恵まれる。

オファ王夫妻は、王女たちの一人を同じイングランドの、ノーサンブリア地方の領主に嫁がせる。戦乱の打ちつづく時代であるから、この娘婿もしばしば出陣しなければならなかった。スコット人がノーサンブリアに侵入してきた時、オファ王は娘可愛さから、自ら軍勢を率いては、この娘婿に加勢をし、撃退に成功する。

オファ王は戦いの勝利を王妃に報せようと手紙をしたためるが、娘婿は義父の戦勝を妬んで手紙をすり替えてしまう。改竄された手紙には、

> 「オッファ王は敗北した、この敗北は高官の同意なしに婚儀をおこなったがための罰であり、それ故、王妃と王子たちの手足を切断したのちに、荒地に捨て去るように」

との命令が記されていた。娘婿は、義母と義理の

弟たちを死地に追いやるような陰謀を企てたのであった。

王の留守をあずかる家臣たちは、王子たちを荒地に連れ出し、手足を切断して殺してしまい、王妃は生きたまま置き去りにする。王妃は、荒地を彷徨するうちに一人の隠者に出会う。隠者が子供たちの切り刻まれた身体の部位を集めて整え、その上で十字をきって祈ると、王子たちの切断された手足はくっつき、生命が甦る。母子はこの隠者の保護のもとに暮らしていく。

オファ王は戦争から戻って事の成り行きを知り、悲嘆にくれる。やがて妻子を探索する旅に出、隠者の庵に辿り着く。家族は再会し、幸せに暮らすことができた。王はこの恩に報いるために、隠者に修道院を建ててやる約束をしたということである。これがアルバン修道院であり、その縁起譚である。

3．1．a　文献解題と若干の解説

紀元250年頃、ローマ帝国軍支配下のイングランドの街ヴェルラミウム（現セント・オバンス）で、キリスト教聖職者を匿い、自らもキリスト教に帰依したアルバンなる人物が処刑されている。この人物がのちに聖人に列せられ、これを愛でて、マーシア王オファの命により、793年、当地に修道院が建立された。建立譚は、オファ王の妃と子どもたちの生命が、聖アルバンの奇跡の力によって護られ、甦ったことへの報恩について語っている。

この物語の女主人公は、一度目は生家を、二度目は婚家を追い出されて、森や荒地を放浪しなければならなかった。また、手紙の書き替えによって人生が暗転してしまう点など、「手なし娘」の原話ないし類話として扱っても問題はないであろう。

もっとも、この物語で手を切られるのは女主人公ではなく王子たちであり、しかも足までも切り落とされている。これは、敗軍の將の子息が多くの場合生命を奪われるか、手足を切断されて放り出される故事に因んだストーリー展開かと思われる。いずれにしろ、手足の再生という奇跡が起きている点も、これまでに見てきた種々の類話に共通した重要なモティーフである。

3．1．b　実在の王オファ

そもそも、オファという名の王は実在の人物であり、歴史上二人いる。一人は4世紀後半、アンゲル族がまだヨーロッパ大陸、ユトランド半島の付け根のあたり、今日のシュレスヴィヒ地方にいた頃の族長である。この王は7才まで目が見えず、30才まで口がきけなかったと伝えられており、そのために王位継承にクレームをつけられ、王位を奪おうとした人々と壮絶な戦いをくりひろげなければならなかった。この王を仮にオファ一世としておこう。

アンゲル族はその後、民族移動の流れに乗って海路ブリテン島に渡る。5世紀初めにローマ軍がブリテン島から撤退すると、その空隙をつく形でゲルマン人の進攻が激しくなり、アンゲル、サクソン、ユート族がケント、エセックス、ウェセックス、サセックス、イーストアングリア、マーシア、ノーサンブリアの七王国を建設し、相互に覇権をめぐって争っていた。

オファ一世から数えて12代目に、オファ二世王が登場する。彼は、8世紀後半のブリテン島にあったマーシア王国の王（在位757年頃～796年）であり、西に国境を接するウェールズ人の王国を征服し、193キロメートルにも及ぶ「オファの防塁」を建築した。オファ王は、以後ウェールズ人の侵入を防ぎ、マーシア王国の全盛期を導いた英傑である。彼はケント、サセックス、イーストアングリア、ウェセックスを確保し、イングランド南部を統一し、「全イングランドの王 rex　totius Anglorum patriae」を自称している。

王は、大陸のフランク王国のカール大帝（シャルルマーニュ）宛てに、同盟締結の提案もおこなっている。これは双方の王子のもとに双方の王女を輿入させるというものであったが、カール大帝はこれを実現させることはなかった。それでも両国の関係は、当時イングランドの衣料製品が大陸に大量に輸出されるなど緊密であり、オファ王はフランク王国に範をとった幣制改革をおこなっ

て国力を充実させたという。

また、当時フランク王国における宗教界では、アルクインをはじめとするノーサンブリア出身の聖職者が活躍しており、この面からもフランク王国とイングランドとの良好で親密な関係が保たれていた[16]。

二人のオファ王について伝える『オファ王の生涯の物語』は、詩編ではあるが、歴史学上の史料としての価値も認められている。物語に出てくる国名も時代状況も、歴史的現実をいくらかは反映しているといえる。

3．2　もっと古いオファ王の妃について（①）

初期中世、西暦8世紀に作られ謡われ始めたとされる、イギリスの英雄叙事詩『ベーオウルフ』には、オファ王とその妃が登場する。もっとも『ベーオウルフ』の27節に登場するのは、4世紀のアンゲル族の王オファ一世とこの王に嫁いだモードスリューゾという女性である。

モードスリューゾは高貴な生まれで「美貌に恵まれて」はいたが、「家臣のうち誰一人として、敢えて白日の下にて、かの女性を正視する者はなかった」というほど気位の高い女性であった。彼女を正視する家臣があれば、モードスリューゾは「侮りを受けたという、謂れなき怒り」に駆られて、その「忠実なる臣下の命を」奪っていったと伝えられている。

かかる「おぞましき罪を犯していた」モードスリューゾが、父親の指示により（be faeder lare）海を越えてオファ王のもとに嫁してからは、一転して「乱行に及ぶことは絶えてなかった」（以上は岩波文庫、忍足欣四郎訳による）とされている。

結婚前の彼女は、気性が激しくて高慢で、まるで悪女の典型のような人物として描かれている。それが、「父親の指示によって」オファ王に嫁してからは、生まれ変わったように賢夫人となったというエピソードが語られており、それは高邁なる人物にして勇猛さをもって鳴るオファ王への、清らかな愛のゆえであったと謡われている。

3．2．a　文献解題と若干の考察

古英語で書かれている『ベーオウルフ』が成立した時期は、8世紀から9世紀にかけてと推定されている。デンマークなど北欧を舞台とし、主人公である勇士ベーオウルフが、夜な夜なヘオロットの城を襲う半人半獣の怪物グレンデルや炎を吐くドラゴンを退治するという英雄譚であり、現在伝わっているゲルマン諸語の叙事詩の中では最古の部類に属する。この叙事詩の成立の地は、碩学ベーダ（672/73～735年）の時代のノーサンブリア王国かオファ王の治世のマーシア王国であったと考えられてきた。

R. W. チェンバースは、その著書『ベーオウルフ―史詩研究入門およびオファとフィンの物語についての議論―』のなかで、このオファ王の妃の話が、フランスの「マヌキーヌ」、チョーサーの「法律家の話」やビザンツの「クースタン物語」へと連なっていくと述べている[18]。また、古くはステファノヴィッチが、『ベーオウルフ』の当該箇所の翻訳について、従来の見解とは異なった訳が可能であるとの指摘をおこなっている。ひとつは「白日の下に正視」云々の箇所は、高貴な生れの女性が城内の塔などに住まわされ、父親の厳しい監視下に置かれていたため、青年騎士らと対面することが叶わなかったという意味だとされている。この禁を犯せば、忠実な臣下といえども命を奪われたとあるのも、父王によってそうされたと解釈できそうだということで、このことは、幾多の例によって証明することができるというのである。

いまひとつは、“be faeder lare”を「父の提案の故に」と訳せること、つまり父親による干渉、あるいは父親による実の娘への結婚の申し出があって、これから逃れるために「海を越えた」と読めるということである。こうしてみると、8世紀の『ベーオウルフ』におけるオファ王妃の物語は、12世紀の『オファ王の生涯の物語』に内容的にも繋がっていくことになる。また、ステファノヴィッチは、モードスリューゾを、その激しい気性などから、ゲルマン神話におけるトリュドに準えている。このトゥルドは、雷神トールの娘であ

りながら妻ともされた大地女神であるが、『ベーオウルフ』にはこうしたゲルマン神話のモティーフが背景にあるとの指摘も行なっている[19]。

4．ルーツについての諸説

「手なし娘」のルーツを求めて、現代から12世紀まで、『ベーオウルフ』を含めると8世紀まで遡ってきた。この物語は世界各地に広く流布していることもあって、古くから、どこに起源をもつ物語なのかの議論がなされてきた。本章では、メルヘンのルーツ探しとでも言うべき問題にアプローチしてみよう。

4．1　イングランド起源説とその検討

フランスの「ラ・マヌキーヌ」を19世紀の末に校訂出版したスシェールは、この物語の起源をイギリスの『オファ王の生涯の物語』に求めている[20]。イングランドが、1066年にフランスのノルマンジー公国からやってきたノルマン人に征服されて以降、フランスとの密接な関係を取り結んでいたことを考えると、『オファ王の生涯の物語』がドーバー海峡を渡って大陸にもたらされ、それがアルプスを越えてイタリアやスペインに伝えられたという経路もその可能性も、十分に考えられる。「ラ・マヌキーヌ」の作者ボマノアール伯は、若き日にイングランドに留学していたから、ひょっとすると、聖アルバン修道院に伝わる『オファ王の生涯の物語』に目を通した可能性もある。

ところで、この『オファ王の生涯の物語』は、通説によると、アングロ・サクソン起源であり、成立年代はゲルマン古代にまで遡りうるとされている。オファ王の物語に出てくる妃と『ベーオウルフ』のモードスリューゾなる女性との間に関連性があるということにでもなれば、物語のルーツは400年も遡ることになる。また、この物語の主要なテーマ—父親が実の娘を追い詰めていくストーリー—を、インド＝ゲルマン神話の世界にまで遡らせて考える、前述のステファノヴィッチの説もあるが[21]、この点については未解明の部分が多く、行きすぎの感は否めない。

4．2　ビザンツ起源説とその検討

クラッペは、『オファ王の生涯の物語』が、西欧の種々の「手なし娘」の源泉であることを認める反面、『オファ王の生涯の物語』のルーツを、ゲルマン古代にまで遡らせる点には疑義を呈している。彼はノルマン人によるイングランド征服から1世紀も経ってから、イングランドでこの物語が初めて書かれたという点を問題にしている。つまりフランス化ないしノルマン化されて既に久しいイングランドで、なぜアングロ・サクソン時代のオファ王が持ち出されなければならなかったのか、説明がつかないという次第である。クラッペは、そのルーツをかつてのビザンツ（東ローマ）帝国に求める。

クラッペ説の主要な根拠は3つある[22]。ひとつは、ヘレーネとかコンスタンツ（クースタン）といった登場人物の名前である。また主人公の父がコンスタンチノープルの皇帝であったり、ハンガリー、ロシアの王であったりするなど、東欧がこのメルヘンの主要な舞台のひとつになっている。クラッペによれば、メルヘンのなかでヒーローやヒロインが帯びている名前は、そのメルヘンが語られている国で最も良く知られた、有りふれたものである場合が多いということである[23]。

もうひとつの根拠は、近親結婚についての考察にある。クラッペによれば、東方世界では王朝内での近親婚が繰り返される習慣があり、有名なところではプトレマイオス朝エジプトのクレオパトラがいるし、古代のユダヤ宮廷社会でも近親結婚がしばしば見られた。キリスト教は東でも西でもこれを禁じているが、ビザンツ帝国はヘレニズム的東方世界における古代王朝の後継者として、この習慣に寛容であったようだとされる。ギリシア語を話す小アジアの住民の間では、近親婚がキリスト教時代になってもさかんに行なわれており、19世紀までそうした事例の報告があるということである。

しかし、そうした慣行は古代ローマ帝国や西欧の中世にも認められていたので、近親婚を根拠と

するこの論説は、あまり説得力をもっているとは言えない。

ビザンツ起源説の第三の根拠は、次のようなものである。クラッペは、オファ王の物語の系統に属する類話を、タイプA（ヒロインの産んだ子をヒロインの父親が殺害する）と、タイプB（手紙の偽造とヒロインの手ないし腕の切断がなされる）とに分類し、その混合形をタイプCとする。西欧の「手なし娘」の大半はこのタイプBに属し、オファ王の物語はタイプCに属するとされる（付表参照）。彼によれば、混合型が生じるのは、A、B両タイプが豊かに伝承されている地域においてであり、イングランドはそうした状況にはないとされる。これに反して、ビザンツ的東方世界、バルカン半島にはA、B、Cいずれの話型も豊かに伝承されており、これらの地を当該説話の起源の地であるとする根拠たりうるとされる。

クラッペの採用した方法が仮に正しいとすると、民話のルーツに関する研究にとっては、まことに実り豊かな貢献をなすことと思われるが、理屈の上からは、逆のケース、つまりタイプCからタイプAとタイプBが生じるという可能性もありうるし、中世の書籍伝承と現代の採話との時系列上の隔たりの問題もあるので、ただちに賛同するわけにはいかない。

クラッペ説への反証もある。書籍伝承に関する「付表」を見れば一目瞭然、イタリアにはクラッペのいう3類型が揃って出てきている（④、⑦、⑧）。このことは、ルーツ探しとは別に、この物語が西欧世界に流布するに当たって、イタリアが一つの重要な発信源となった事実を物語っていると言える。

ともかくも、主として以上の3つの根拠から、クラッペはこのメルヘンのルーツがビザンツ的東方にあり、それが十字軍遠征ののち、おそらくは12世紀初頭に、従軍した将兵によって西ヨーロッパに持ち帰られ、イングランドにも持ち込まれたのであろうと推測している。これが聖アルバン修道院の一僧侶によって、当院の建立に功績があり、そのゆえに当院に祀られてもいたマーシア王オファの物語に書き加えられたのであり、その時期は12世紀の末であるとされる。オファ王の物語は、一修道院の建立譚としての性格をもたされたので、おそらくはそう広く読まれることはなかったであろうとの推定もなされている。

なお、フランスの2つのバージョン「ラ・マヌキーヌ」と「コンスタンチノープルのエレーヌ」では、イギリスが主要な舞台のひとつとされていた。これは、クラッペによれば、フランスのバージョンがイギリスの「オファ王の生涯の物語」をベースにしたからだ、ということになる。

なお前述したように、M. ハインツェも『メルヘン百科事典』6巻の「コンスタンチノープルのエレーヌ」の項において、クラッペの説を簡単に紹介しつつ、「手なし娘」のルーツをビザンツに由来する民話に求めている。

4．3　アラビア・スペイン起源説とその検討

スペインの文学史家メネンデス・イ・ペラーヨは、「手なし娘」のルーツをアラビアないしインドなどの東方世界に求めている[24]。ペラーヨが言うように、8世紀初頭以来イスラム教徒の支配下にあったスペインに、インドないしはアラビア生まれの「手なし娘」の物語が持ち込まれ、翻案されつつ、隣接するイタリアあるいはピレネーを越えたフランスに伝えられたという可能性は、あながち否定しきれないものがある。ペラーヨの説は一つの有力な仮説の域をでないが、スペインに「手なし娘」の多様なバージョンが揃っていることを指摘しておきたい。筆者が前稿において明らかにしたように、現代の西欧に伝わる「手なし娘」の種々のバージョンのなかで、主人公の手が切断される理由は、次のように国・地域ごとに多様なものであった。

⑴　娘が父ないし兄との結婚を承諾しないため（近親相姦型）：イタリア、フランス、スペイン、ドイツ

⑵　父親が娘を悪魔に売り渡したため（悪魔型）：イタリア、フランス、スペイン、スイス、ドイツ

⑶　娘が神に祈るなとの禁止に違反したから（信仰型）：スペイン、ドイツ

⑷ 母親ないし継母の娘に対する嫉妬から（継子型）：ギリシア、スペイン、フランス
⑸ 嫁が義妹＝小姑との葛藤のすえ実子を殺害してしまったから（兄嫁型）：ブルターニュ、イギリス、ロシア
⑹ 娘が貧者に施し物を与えるなとの禁令に背いたから（施物型）：イスラム世界、スペイン
⑺ 娘婿が義父の戦勝を妬んで（嫉妬型）：イギリス

スペインには、⑴、⑵、⑶、⑷、⑹のバージョンが見出せる。この事実が直ちにペラーヨの説を補強するものとは、筆者は考えていないが、口承のバージョンが多いことは、種々の文化の流入と混淆を物語るものである。近世以降、スペインはイエズス会宣教師を世界に送り出し、キリスト教をはじめとする西欧の精神文化の発信源となったのである。

5．ルーツについての総括

以上の諸説を補足する若干の資料や考察を加えつつ全体を総括し、本稿なりの考え方を示しておきたい。

5．1 近年採録された類話の地理的な分布

ヨーロッパに流布している「手なし娘」の物語の地理的な分布状況をみてみると、地中海のバレアレス諸島、イタリア、スペイン、フランスのバス・ノルマンディー地方、ブルターニュ地方、スイスのフランス語圏、イギリス、さらにドイツ、オーストリアといった西ヨーロッパ各地のほか、東南方面ではギリシア、セルビア、ビザンツ（東ローマ）からトルコ・アラビア半島にかけて、東北方面ではハンガリーやロシアの地にまで広がっている。

アールネ・トンプソンが採話した「手なし娘」の類話だけでも、西欧163話、東欧145話、南欧79話、北欧59話もあり、トルコ１話、インド２話、西欧諸国のかつての植民地、フランス系アメリカで30話、スペイン系中南米で12話などとなっている。

さまざまな民族が偶然同じような物語を作ったという可能性はゼロではないが、物語の起承転結や複数のモティーフまでがほぼ同じということになると、どこかに起源があって、その話が四方八方へと伝播したと考えるほうが理にかなっている。

興味深い物語は、人の口をとおして語り継がれ、運ばれて、遠くにまで「旅」をすることがある。スペインやポルトガルのかつて植民地に、「手なし娘」の物語が広く流布していることが、そのなによりの証拠である。スペイン民話の研究では第一人者である三原幸久によれば、スペイン語圏だけでもスペイン本国は20話、中南米で25話、ポルトガル語圏で５話と、アールネ・トンプソンの採話の２倍以上もの資料が集められているということである[25]。

この背後には、イエズス会の宣教師の活動があったこともほぼ確実に推測できるし、日本の「手なし娘」もまた、この線上に位置づけられる、との見通しもたつ。

5．2 書籍伝承の時系列を逆にして系譜関係を探る

この物語の主要なモティーフたる「父ないし兄による近親姦」「手の切断」「手紙の改竄」「失われた生命や身体が甦る奇跡」を略記した付表を参照しながら、系譜関係を探ってみよう。

表の①から③までの書籍伝承は、モティーフを基準としたメルヘンの分類学上、いわゆる「近親姦型」に属する。①と②の系譜関係は明らかであるが、内容的な繋がりに乏しい。クラッペによる分類では、それぞれＣ型、Ａ型、Ｂ型であった。

通番③、⑥、⑧、⑨－ⓐはすべてのモティーフを含み、かつ時系列上、順次、影響を及ぼしていることは、十分にありうる。このグループの書籍伝承は、分類上はすべて「近親姦」型である。

これに対して①、②、④、⑤、⑦には「手の切断」と「甦りの奇跡」の部分が欠落している。④、⑤は同じ14世紀に属し、十字軍時代のイスラム世界を背景としている点でも、共通するものを有している。モティーフの観点からいうと、④、⑤と

もに父親が娘の結婚相手を決め、主人公の運命がここから暗転している。④と⑨－ⓐはメルヘンの分類学上「悪魔型」の亜種である。

こうしてみると、西欧の書籍伝承には、異なる２つの系列があったことが判明する。

５．３　書籍伝承と口頭伝承の特徴と相互補完

口頭伝承されてきたものが、ある時期に文字化されると、口頭伝承説話に宿命的な可変性にセーブがかかり、あるいはその後に種々のバージョンが生まれても、結局のところ文字化された物語に収斂されていくことになる。つまり、伝承の固定化がそこから始まるといえる。

たとえば、文字資料としての②『オファ王の生涯の物語』を起点として考えてみると、バージョンの③、⑥と⑧は、②と共通の発端部分をもち、手の喪失についても共通のファクターをもっていることがわかる。ここから、書籍による伝承は、500年を経過しても、物語のストーリーを大きく変えないという傾向が見て取れる。これには、そうした書物を読む階層、あるいは書物の朗読を楽しむ階層、さらには吟遊詩人たちを招いて物語を詠唱させた階層の人々の、保守性が作用していたのかもしれない。

これに反して、文字文化の恩恵に浴することの少ない階層の人々は、人伝て、口伝えに物語を継承していくから、古の難しい国名や地名、王や王妃の名前、登場人物の位階、あるいは、その他の細かな情報を忘却してしまう。主人公の父親の職業は樵や粉屋、農夫となり、主人公の放浪・流浪する地域や範囲も狭められ、主人公の夫の出征先も特定されぬままとなる。

しかし逆に、口頭伝承の説話は自由な変容を遂げることができ、時代や地域の特性を存分に受容することもできる。近・現代になってから文字による記録がなされた国々の「手なし娘」の物語は、実にバラエティーに富んでおり、より新しい時代相がさまざまな形でストーリーの中に織り込まれている[26]。

ヨーロッパの「手なし娘」の物語には、書籍伝承上は二つの系統があり、そのルーツについてはビザンツ説・イングランド＝ゲルマン説・アラビア＝スペイン説の、三つの可能性があったが、いまだその決着はついていない。また、この物語が広範に流布した時期については、十字軍時代からルネサンス期と、大航海時代から植民地支配時代とが考えられ、前者についてはイタリアが、後者についてはスペインが、有力な発信源となった、と結論づけることができよう。

口承の説話がある時期に文字で記され、その書物を読んだり、読み聞かされたりした者がそれを他の者に語って聞かせる。それが口頭伝承され、長い年月の後に再び文字で記録される。双方が相互補完的な役割を果たしながら、時代が流れ、物語は「旅」を続ける。この間、書籍伝承は物語のストーリーを固定化する方向に作用し、口頭伝承は物語の多様化をもたらした。こうした視点を確固としてもつならば、物語が起源した時期や土地を確定することに、それ自体としてはあまり固執すべきではないと言える。

注

１）拙稿「海を渡ったメルヘン」『社会情報学研究』17号　pp. 113－135

２）グリム版の手なし娘については、Märchen Lexikon, SS. 800–803. および拙著（2006）pp. 164－184を参照せよ。悪魔型と近親姦型とがあるが、いずれもフランスからドイツの地に移住した婦人によって伝承されたものである。付表に通番⑨として内容を略記した。

３）内容の紹介は、Märchen Lexikon, SS. 1178–1181 に拠った。

４）拙著 pp. 81－83

５）Schild, W., Alte Gerichtsbarkeit. 1980, S. 207, 図469（15世紀フランス）図471（17世紀ドイツ）。四つ裂き刑については、S. 99, 図194（16世紀ドイツ）など参照。

６）三原幸久（1995）pp. 252－253

７）Enzyklopädie des Märchens. SS. 767–772.

８）なお、切断した手を王子の首にくくり付ける

くだりは、1世紀頃編纂されたアポロドロスの『ギリシャ神話』(高津春繁訳、岩波文庫)にもでてくる。ヘラクレスが、テーバイに向かうエルギーノス王の使いの者らを襲って「耳と鼻と手を切り取り［縄で］頸に結びつけ、これを貢ぎ物として持っていくようにと言った」とある。

9) 後述4.2のクラッペ説を参照のこと。

10) Märchen Lexikon, SS. 804–805.

11) Märchen Lexikon, SS. 828–831. なおフランス語のmannequinは、中世オランダ語でmanの愛称形mannekijnに由来するという。13世紀にはまだ現代のマネキン人形の意味はない。

12) 『バイエルン部族法典』(世良晃志郎訳、創文社)には、王族の身体的資質に関する規定があり、どこにも欠損がないことが条件とされていた。みずからの手を切り落とす行為は、そうした歴史的背景のもとに理解すべきものである。

13) あるケルトの伝承によると、ヌアダという名の王は、アイルランドを占領・支配していた者との戦闘で右腕を失ってしまい、このために王は統治能力を喪失してしまう。ジョイの切り落とされた手が右手ではなく左手であったことに注意を払う必要がある。ジョイがスコットランドの王の妃に迎え入れられたのは、右手が残っていたからなのであろうか。ロベール・エルツの『右手の優越』(吉田禎吾訳、垣内出版、1985年)という書物によれば、多くの民族・部族のもとで、右手は聖性や正義や力を、左手は不浄や邪悪や死を表象するという、象徴的二元主義がみられるということである。右手によってなされる宣誓、契約などの行為は、人間の力、行為に重みを与える権威となりえるが、左手は威信も精神的な力もなく、破壊や悪のみに効力をもっているとされる。このように左手が無視され軽視されるのは、左手が弱く無力であるからではなく、右手を優先させる社会的ないしは宗教的な強制力が働いているからにほかならない。

エルツのこの書物には、まだ乳飲み子の時に母親の左の乳房からは乳を飲むことを拒んだという、敬虔なキリスト教の聖職者がいたことが紹介されている。これほどに左手ないし左そのものが卑しめられていた時代があったのである。

猿の社会では両手使いが一般的であり、ほかの動物の場合にもこれが当てはまる。それなのに、人間の社会でだけ右手が優越していることについて、ロベール・エルツは「左手は切断を強いられている」と形容している。ここでいう切断とは、言うまでもなく、外科的、解剖学的な処置ではなく、生理学的な次元で左手の機能を奪ってしまっていることを意味している。西洋中世の図像のなかにも、右手が正義、創造、統治の象徴として表れている。

14) 前嶋信次訳の東洋文庫版の339、第9巻、第348夜　74－77頁。

15) 聖アルバンについては、ベーダ(長友栄三郎訳)『イギリス教会史』創文社、1988年版、20－23頁参照。

16) Stefanović 486頁以下によった。印刷本としては1640年頃、ロンドンで出版されたということである。

17) Oxford History of Britain, pp. 83–90.

18) R. W. Chambers, Beowulf, An Introduction to the study of the poem with a discussin of the stories of Offa and Finn. 1963, Cambridge UP.

19) Stefanović, p. 522 ff.

20) Stefanović, p. 483.

21) Stefanović, pp. 520–525.

22) Krappe, pp. 363–368.

23) イギリスの「ジャックと豆の木」のジャックとか、ドイツの「幸せハンス」のハンスがその良い例だというのである。

24) エスピノーサ編『スペイン民話集』三原幸久による訳注(39)。

25) 三原幸久(1995) p. 258

26）ロバート・ダーントンは『猫の大虐殺』という書物において、書籍伝承はもとより、口頭伝承にも、時代の情報が豊富に織り込まれているといった趣旨のことを述べている。「手なし娘」の各種バージョンには、西欧の政治や宗教の事情が多々含まれていたが、ソ連邦時代のロシアのバージョンでは、子殺しなどの残酷な場面が省かれ、主人公の敬虔さやキリスト教の神による奇蹟の部分も削られていた。これもまた、口承のメルヘンが時代の制約を受けつつ、その時代の情報を取り込んでゆく、ひとつの逆の事例と受けとめることができる。

参考文献リスト

エスピノーサ編（三原幸久編訳）（1989）『スペイン民話集』岩波書店

小沢俊夫編（1977，78）『世界の民話六　イギリス』『世界の民話13　地中海』ぎょうせい

忍足欣四郎訳（1990）『ベーオウルフ』岩波文庫

唐沢一友編（2009）『《ベーオウルフ》とその周辺』春風社

田中泰子訳（1976）『ロシアの民話』三弥井書店

チョーサー（西脇順三郎訳）（1993）『カンタベリ物語　上下』ちくま文庫

バジーレ（杉山洋子・三宅忠明訳）（1995）『ペンタメローネ（五日物語）』大修館書店

前嶋信次訳（1978）『アラビアン・ナイト』（東洋文庫）平凡社

三原幸久（1995）「昔話〈手無し娘〉の伝承と伝播」福田晃編『民間伝承』世界思想社

森義信（2006）『メルヘンの社会情報学』近代文芸社

Basile, G. (Übertrag. v. Felix Liebrecht) (Nachdruck 1973), Der Pentamerone oder Das Märchen aller Märchen. 1846 Georg Olms Verlag

Hersg. v. Beck, H. (1988) Heldensagen und Heldendichtung.

Drewermann, E. (1981) Das Mädchen ohne Hände : Märchen Nr. 31 aus der Grimmschen Sammlung.

Gesammelt durch Brüder Grimm (1991) Kinder -u. Hausmärchen. WBG.

Howe, N. (1989) Migration and Mythmaking in Anglo-Saxon England.

Karlinger, F. (1994) Menschen im Märchen. Studien zur Volkserzählung.

Krappe, A. H. (1937) The Offa-Constance legend. In : Anglia, 613/4 pp. 361–369.

Lange, W. (1964) Angl. Dichtung. Geschich. Schleswig-Holsteins II, SS. 327–335.

Ed. by Morgan,K.O. (1999) The Oxford History of Britain. Oxford Univ. Press.

Hrsg. v. Ranke, K. (1999ff) Enzyklopädie des Märchens.

Hrsg. v. Rölleke, H. (1982) Kinder-u. Hausmärchen. Nach der 2ten vermehrten und verbesserten Auflage von 1819, Eugen Diederichs Verlag

Hrsg. v. Scherf, W. (1995) Das Märchen Lexikon. Bd. 1, 2. C. H. Beck.

Schick, J. (1929) Die Urquelle der Offa–Konstanze–Sage, In : Britanica, Leipzig, SS. 31 –56.

Stefanović, S. (1912) Ein Beitrag zur angelsächsischen Offa-Sage. In : Anglia, 35, pp. 483–525. Unverändert Nachdruck 1963, Johnson Reprint Corporation , New York, London

Hrsg. v. Uther, H. –J. (2003) Deutsche Märchen und Sagen, Digitale Bibliothek 80.

書籍伝承	父—娘／近親姦	手の切断	手紙の改竄	手が甦る奇跡	地理的広がり	歴史的情報	分類
① 8c. 英,『ベーオウルフ』	父王⇒娘への結婚の申し入れ？ 娘は海を渡る				デンマーク→イングランド	アングル族／オファ王	近親姦型 クラッペC型
② 12c. 英,『オファ王の生涯の物語』	父王⇒娘を妻にしようと迫る 娘が拒絶すると森の中に捨て去られる	（息子たちの手足の切断）	（王妃と王子の手足を切断して荒野に捨てよ）	荒野の隠者（聖アルバン）が十字を切って息子たちを蘇らせる	イングランドのヨーク・マーシア・ノーサンブリア	聖アルバン／マーシア王オファ	近親姦型 クラッペA型
③ 13c. 仏,ボマノアール『マネキーヌ』	父王⇒娘に結婚を迫る 娘は拒絶の意思表示	左手首を切り落とし、川に流す	獣のような毛深く頭の大きな子を産んだ／ 母子ともに火刑に処せ	川に流した手首がある泉で見つかり、教皇の祈りで手首にくっ付く	ハンガリー・スコットランド・地中海・ローマ／フランス	騎馬試合／ハンガリー王 キリスト教への帰依	近親姦型 クラッペB型
④ 14c. 伊,フィオレンティーノ『愚者』	父王が娘を老人に嫁がせようとした 娘は女子修道院に逃れる		２匹の子猿を産んだ／ 母子ともに殺害せよ		フランス・イングランド・ジェノバ・ローマ	十字軍遠征	悪魔型亜種＝実父・姑の悪意 クラッペC型
⑤ 14c. 英,チョーサー『カンタベリ物語』	父王が娘を異教徒の王に嫁がせる	（女主人公の伴揃えを虐殺／城主夫人殺害）	鬼子を産んだ／ 母子ともに海外に追放せよ	神明裁判、神の手	ローマ・シリア・ジブラルタル・イングランド・ノーサンバランド・スコットランド	ローマ皇帝／イスラム世界アラ王／皇帝マシリウス／神判／ブリトン語福音書	クラッペC型
⑥ 14c.末－15c.？ 仏,「コンスタンツのヘレーネ」	父王⇒娘に結婚を迫る 娘は海外に逃亡し、女子修道院に入る	右手を切り落とす。家臣の姪の左手が切り落とされ、身代りに火刑に処される	二匹の子犬を産んだ／ 母子ともに火刑に処せ	聖マルタンの奇跡の力により右手が接着	コンスタンチノープル・フランドル・フランス・イングランド・ナント・トゥール	イスラム教徒のローマ侵入／イギリス王ヘンリ／大司教マルタン	近親姦型 クラッペB型
⑦ 16c. 伊,ストラパローラ『楽しき夜毎』	父王⇒娘の指への偏愛 娘は乳母の助けで海外に逃れる	（女主人公の産んだ２人の子を父が殺害）			サレルノ・ジェノバ・ブリタニア	女主人公への処刑法	近親姦型 クラッペA型
⑧ 17c. 伊,バジーレ『五日物語』	兄⇒妹の手への執着 娘は拒絶の意思表示 兄の逆鱗に触れ海外追放	自らの両手首を切断して兄に差し出す	化け物犬を産んだ／ 母子ともに火刑に処せ	王の魔法の力によって甦る	海・海外 架空の王国名 人名はイタリア		近親姦型 クラッペB型
⑨ 19c. 独,グリム兄弟『メルヘン集』	ⓐ悪魔⇒女主人公の手を切れ ⓑ父親⇒娘に欲情	父親が切断を実行 父親による両手・乳房切除	鬼子が生まれた／ 母子ともに追放せよ	ある年寄による奇跡			悪魔型 クラッペB型 近親姦型

Fairy Tale Traveling in Wide Areas and Coming Down in Time —Search for the Origin of European Fairy Tale "Daughter without Hands"—

YOSHINOBU MORI
School of Social Information Studies, Otsuma Women's University

Abstract

The fairy tale "Daughter without Hands" has been orally handed down throughout Europe. The oldest version of the story that has been passed down as a book and goes back to the 12th century. There are various opinions about the place of origin of this story, and many researchers have enumerated England, the Byzantine Empire, and Arabia–Spain.

My opinion is as follows. From respect of passing down by the book, England is the most likely place of origin. But there were not so various other versions of this story as in European continental countries. From the viewpoint of the motif and the historical background of this story, the Byzantine Empire is the likelist place of origin. The Byzantine Empire has had from ancient times a lot of contact with the eastern world, and has received strong influence from Islamic literature. Moreover, from the viewpoint of various versions of this story, Italy is the likeliest place of origin. Italy also received influence from the Byzantine Empire and Islamic community through the Crusade Age. Italy dispatched the cultural information during the Renaissance period. It can be understood that various versions of the story have circulated here, and many books have been published. Spain received Italian culture to say nothing of Islamic–Arabic culture from age of the Reconquista and Geographical Discovery. Downward Spain sent the Christian culture and oral literature of Europe toward the world from the outside.

This fairy tale has circulated all over the world. The oral story was recorded by letter at one period, and read widely. A person who read the book, told the story orally to other persons. They handed down it from generation to generation. And at another certain period, the story would be recorded. This cycle has been repeated again and again. It can be said that this story will have done "Travel" in the age and the region.

The oral tradition and the passing down of the book were complementary to each other and came hand in hand. Therefore, it is not so significant to request a single place and period of origin.

Key Words（キーワード）

amputation（手の切断），falsify of letter（手紙の改竄），incest（近親姦），fairy tale（メルヘン），folk story（民話），daughter without hands（手無し娘），passing down of the book（書籍伝承），oral tradition（口頭伝承）